
魔法先生ネギま！ 黒椿の担い手

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 黒椿の担い手

【Nコード】

N1331V

【作者名】

桜楼月華

【あらすじ】

漆黒の刃シリーズとネギま！のクロスオーバー。

漆黒の刃は俺が描いてる小説です。まだ描き始めたばかりだけど、どうかそっちも読んでください。

これから主人公と誰をくっつけてやろうか、楽しみですフヒヒ。

(注…完全な自己満足小説です)

異世界への侵入（前書き）

これは漆黒の刃を読んだ後読んだ方がいいかもしれません。
まあ、漆黒の刃もまだ書いてる途中なんですがね。

パラレルワールドに入り込んだ的な設定でよろ。

時間的にはナギと別れてしまったという設定の時間ですね。
少なくとも、漆黒の刃の方の小説が終わってる頃。

異世界への侵入

S i d e カオル

気付かぬうちに来ていた場所は日本とは思えない場所だった。
てか本当にどこだここ。

俺は城崎カオルという元人間であり現在守護者だ。

守護者がナニか、という説明を簡単にしよう。そこらにいる生物以上の力を持つ者（基本的には人間よりも優れた知能に優れた力を持つ者）との契約により、使徒と呼ばれるこの世に蔓延る者を叩き潰す存在だ。

人外との契約をする者が多いが、俺は守護者の上を行く存在『守護神』との契約を果たし守護者となった男です。

俺の中には俺を所有者だと認めた宝具と呼ばれる物が幾つかある。人間の頃から持っている俺の一番信頼を置ける黒椿。黒い柄に黒い鍔、黒い刀身のロングソードだ。

宝具と言っても、いろいろな宝具がある。人間の憎しみ等の感情から生まれる自然的な宝具。黒椿はその自然的に生まれた宝具だ。

宝具の成り立ちは幾つもの複雑に組み合わさっている《術式》だ。術式と言っても魔法とかそういうファンタシーなもんじゃあない。使徒を殺す為にも使われ、太古の昔は人を殺す為だけに使われた。術式とは自ら作り出す力でもある。基本的な術式は《身体強化》

《肉体強化》がある。

そう言った基本的な物以外は自ら術式を組む。

俺が組んで体に登録した術式の内、最も使用回数の多いモノは《雷撃武装》《炎撃武装》だ。

《雷撃武装》は武器や自分に雷の力を働かせるものである。故に、《雷撃武装》をした武器は雷を放ち、《雷撃武装》した体は俗に言う《雷化》する。雷化は雷の特性、つまり物理的攻撃は効かないし、

俺の身体に触れれば感電・ショック死する程。更に思考速度・身体速度が雷速になる、という物だ。

《炎撃武装》も同じく、と言ったところか。

殆どが武器の強化に使う。体に武装させるには負担がでかすぎるのだ……。

更に言ってしまうえば、魔力・霊力共に使用量が半端ない。

黒椿の力だけでも十分事足りるので、術式自体使うことがない。

他に説明すべきことは宝具の概念等か。

概念とは、その武器の持つ特性とでも思ってくれば良い。

例えば黒椿。これの概念は《闇》。闇とは攻撃の象徴だ。ただ殺す為だけの存在、ということでもある。

他にあるとすれば《投擲武器を必ず防ぐ》とか《盾を粉碎する攻撃》なんてモノもあるらしい。

さて、後は使徒か。

使徒とは二種類の使徒がいる。

一つは世界が生んだ人間減少のための使徒。人を食い、人を食うために生きる。

もう一つは人間が持つある感情が最大に膨れ上がった状態で死ぬことで生まれる。言ってしまうえば、使徒として蘇生されるということ。

世界が生んだ使徒よりも知性が高く、理性が働く。

その代わり、自らの目的には絶対に従う奴らだ。

俺が初めて会った使徒は、国に実験体とされ連行され死んだ妹のために笑顔である理想を叶えようとしていた。その理想が、あまりに夢く……なにより、使徒の悲しみなど理解できる範疇を超えていた。

まあ、俺の世界はこんなところだろう。

なんでこんな説明をしたか、というところ……。言ってしまうと、俺は日本出身。

そして俺は今、日本に里帰りだ。里帰りと言っても、既に親は死んでしまっているから自分の町を徘徊していただけ。

だというのに、いつの間にか知らない所に立っていた。

ヨーロッパ風の建物が立ち並ぶ町、だろうか。ということは知らず知らずのうちに転送した？

いや、いやいや、あり得ん。転送できる力を持つ者がいれば気付くさ。

転送って、一種の高等技術だぞ？ 使えるようになるには人を止めるしかないと言われる物だ。

人を止めたとしても転送ができるようになるモノなんて、十本の指に収まってしまう程度だ。

……だが、この光景……どう見ても日本じゃない。

ここであり得るのは異世界だ。ナギという守護神（俺の主の様な女）に教えてもらってことがあるが、この世には異世界が幾つも連なっているとか……。

無自覚に歩いて、使徒の力に中てられ異世界に連れていかれてしまふ、なんていうのは良くある話なんだとか。

と言うわけで、改めて説明をしたわけだ。

誰に説明したのかというと、自分にだ。

ナニか忘れてしまっていないかを確認した。自分の名前を覚えていることがここまで安心できるものとは思いつかなかった。

「貴様、何者だ？」

幼子の声がした、様な気がした。

いや、気のせいだろう。だって今、夜っぼいし。こんな夜中に幼子が出歩くとか………どんだけ不用心なのだ？

いや、そもそも。幼子が「貴様」とか。思わず笑っちゃまうぜ（自分の幻聴に）。

「貴様……私を笑ったな？」

……幻聴も絶好調だなく。一体何が起こってるんだ俺の体。
まあ、現実逃避もそこまでにしよう。

「誰かに何者なのか、教えてもらいたいなら自分の正体を明かすべきだと思うがね」

「ッは！ 貴様の様な人間が私を知らぬ訳ではあるまい……。その歩き方からして、裏に携わっている人間だと思ったのだがな」

裏、というのは守護者のことか？

物騒な表現をするな。

しかしこの物腰。なかなかの力を持つ者と判断して良さそうだ。

声の聞こえる方を振り向く。……が、そこには何もいない。何故？
やっぱり俺の幻聴？

「こっちだこっち！」

「ん？ ……なっ？！」

驚いた。浮遊術だ。

俺も最近やっとできる様になった超高等技術。転送並の高等技術だぞオイ。

いや、それなら力ある者と捉えていいのだが………なんせ外見が…

…。

「こ、子供……？」

金に染まる腰まで届く髪が夜空に良く映えている。

肌は白く、遠くから見ても美少女だというのが分かる。

服は、まあ目のやり場に困るゴスロリ。子供だと言うのにそれが良く似合う。

あ、いや、子供だからこそ似合うのか。

「誰が子供だ、誰が！ ……む？ 貴様、私を知らんのか？」

知りません。家にいたダニの数並に知りませんとも。

「なら貴様、本当に何者なのだ？」

「だからお前こそ何者だ？」

「……良からう、教えてやる！ 我が名はエヴァンジェリン！ エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！！ 悪の魔法使いにして最強の魔法使いだ！」

うわーお、なんかノリノリだな。

……ん？ 魔法使い？

「……魔法使い、ねえ。魔法使いごっこも楽しいだろうけど、家に帰ってあげなよ。親が心配するよ」

「貴様この光景を見てまだそんなことを言うかああ！」

いえいえ、これは単なる現実逃避ですよ。

「しかし、魔法使いとは……まさか本当に異世界か？」

異世界の線が色濃くなってきた頃。

複数の気配がこちらに飛んでくるように来るのが分かった。

「む、邪魔が入ったな」

エヴァンジェリンと名乗った少女が顔をしかめる。

囲まれた、か。

気配の雰囲気から、一般人でないのは明らか。

その中から、一步踏みよるモノが一人。月光により、姿が露になる。

メガネをかけて煙草を咥え、白いスーツに身を包んだダンディな男性。

なかなかの手練れだというのは分かるが……ナギ程ではないな。身体強化をすれば一瞬で距離を埋められる場所にいる。倒すのは簡単だ。

なるべく、人は殺したくないのだがな……。

とにかく牽制だな。加減した殺気を放つともしよう。

「……血の気が多いな。それで、君は何者なのかな？」

温厚そうな笑顔で言う。その裏に、ちょっとした怯えがあったのは言うまでもない。

「俺が何者か、なんてのはこの際どうだっていいことだ。ここはどこだ。答えろ」

「君はここがなんなのか分からないで来たのかい？」

突然回りが騒々しくなる。

少し静かにしてもらいたいものだ。
思考の邪魔になる。

「ここは日本の麻帆良学園都市。かなり有名な場所だと思うんだけどな……」

「有名、なのか？ 俺も日本出身だが、そんなところ聞いたことはないぞ。この学園ができたのはいつだ？」

「もうかなり昔になるんじゃないかな。多分、明治くらい」

……有名、なんだろうな本当に。そもそも学園都市とか言っていた。

なら有名にならない方がおかしいだろう。

「……そいつがここを知らないというのは本当だと思うぞ。表情を見ろ。それにさつき、異世界か、と呟いていた。もしかしたらコイツ、本当に異世界出身かもしれんぞ」

と、意外なことにエヴァンジェリンが助け船を出してくれる。

だが目の前の白スーツ意外の奴らはそれに聞く耳を持たない様な雰囲気放ってくる。

「ところで、その殺気をどうにかしてくれないかな？ さすがに、ちよつと怖いよ……」

苦笑いをしてるところを見ると意外と余裕なんじゃないのか？

「……敵では、ないんだな」

「それは君の目的によるかな」

まだ苦笑い。まあ、こっちに目的は無いんだ。敵ではないのだから

う。

殺気を抑える。と、エヴァンジェリンが急な提案をしてきた。

「こいつを麻帆良の警備員にしてはどうだ？ 或いはタカミチの代わりに2－Aの担任とかもいいかもな」

「な……！？」

今のが誰の声なのか。

その答えは俺だ。俺の声だ。驚いた。

「ここに来た目的などないのだろう？ それに魔法使いでなければこの世界の人間ではないのだ。お前の世界に帰るまでの間、暇だろう？」

なんとなく。なんとなくだが分かった。

こいつは楽しんでいる、と。

「まあ、確かにそれは助かるね。最近本国へ行くことも多くなったし」

「本気ですか、高畑先生……？」

「ああ、僕は本気だよ。これから学園長室に行こうと考えてるくらい本気」

「正直言おう。俺は教員免許なんか持っていないぞ？ それに、この容姿だ。生徒にバカにされないか？」

「僕でもバカにされるくらいだから容姿なんて意味ないと思うけれど……。それに、教員免許も学園長ならなんとかしてくれるよ」

滅茶苦茶だ。

「じゃ、早速行こうか」

「え、ちょ！ ま、待て！ おい！ お前！ 離せええ！」
「お前って……、僕は高畑・T・タカミチだよ。タカミチって呼んでくれ」

腕を引っ張られ連行される。

さっきまでの俺の殺気などどうでも良いと言わんばかりに。

その後、あり得ないこの展開を本当に悔いることになる、とは。

「ふむ……。あい分かった。君を2－Aの副担任として認めよう」

おい。

それでいいのか学園長。てかなんだその頭。絶対人間じゃないぞ。妖怪なのか？ ぬらりひょんなのか？

「それで、カオル君がいた世界とはどんな所なんじゃ？」

「話す必要がない」

「話してくれたっていいじゃないか。それにしても意外だね、担任になるのは認めるんだ」

「タカミチは黙ってろ……」

誰のせいになったかと思っている。あの金髪少女とこのメガネ白スーツのせいだろうか。

恨めしそうな目で睨むが「はっはっは」と流された。

「てか、お前ら魔法使いこそなんなんだ？」

「君は教えてくれんのに、わし等の情報は教えろとは……少々虫の良い話だと思うんじゃないか」

「お前ら魔法使いの基準が分からないんだよ。俺の正体は……まあ、ここが危険な世界だったら見る機会もあるだろう？」

「魔法使いの基準、というと？」

「強さの基準だ。それを教えてくれればいい」

「んゝまあ。基準は高畑君よりも弱いじゃろうな」

なんだそんなもんか。

「しかしまあ、副担任になってくれるとは助かる」

「タカミチって英語の教師だったか？ 俺、英語って高校レベルしか……」

それでも英語の成績は良かったが。うん、英語だけ。

しかし、出張が多い、か。

魔法使いだから、なんだろうな。きっと。

「しかし、俺は教員免許を持っていない。それに、英語だってあまり……」

「大丈夫じゃ、英語かて高畑君に任せればいい」

そんなもんでいいのかねえ……。

あ、そういえば俺の寝泊まりする所って……。

「今夜はタカミチ君の部屋に泊ってくれ。その後は、適当に部屋を用意しよう」

「そうか、それは助かる。でもいいのか？」

「ああ、僕は構わないよ」

なんだろう。妙に適当じゃないか？　ここ。

「では、明日から頼むよ。城崎カオル君」

「ああ……精々期待に添えるようにがんばるさ」

適当なやり取りの後、俺はタカミチと共に部屋に向かい、明日は早いからと言われすぐに寝かされた。

無論、寝れるわけなどない。

不安だらけだ。

ここに使徒がいるのか。魔法使いは好戦的じゃないのか。なににより、副担任などやっていけるのか。

守護者となった俺は睡眠を取る必要がない。

守護者として邪魔な三大欲求が省かれている。

ナギは食欲だけはあったが。

故に、横で寝ているタカミチに悪戯することだって容易だ。ちょっと水生マジックで男爵髭を描いてやった。

次の日の朝、タカミチが洗面台で五分くらい奮闘していたのは言うまでもない。

異世界への侵入（後書き）

どうだったでしょうか。なんとも言えない展開でしたけど。
なによりタカミチのキャラ崩壊とかがマジ酷す。

まあ、これからのストーリーに期待してくれるとマジ嬉しいっす。

……てか、学園長ってタカミチのことなんて呼んでんだっけ？

授業と居候と師匠と

カオルは今2-Aの教室の前にいる。

今日の朝聞いたが、カオルが副担任として通うところは女子校なんだとか。

女、というのにあまり慣れていないカオルにとってみれば緊張するなと言う方が無茶なものだ。

「まあ、元氣過ぎるところもあるけど、なかなか楽しいクラスだから。気楽にしていよいよ」

「ああ、分かってるよ。ところでタカミチ。何故黒板消しのトラップが仕掛けられているのだろう」

タカミチはただ苦笑いするだけ。

恐らく、あの妖怪ジジイのせいだろう。

この一日にも満たない時間で噂でも流されたか。

それとも、ここの噂の広まりが早いのか。
なるべく前者であってほしい。

「まあ、いいか」

扉をガラガラと開ける。

まだ入りはしない。黒板消しのトラップに引っかからない様だ。
だ。

中から舌打ちが聞こえたが……気にしないでおう。

黒板消しを拾いながら中に入ると、思わず頭を抱えた。

数知れぬトラップの数々。その全てが目に見えないワイヤーによるモノだ。

恐ろしいクラスだ……。

目に見えない程度の密度の霊力で構成した刃を作る。空気刃、と言ったところか。

こんなもの、作ったのが初めてだが……まあ大丈夫だろう。ワイヤーを全て切りながら歩むが、バケツが降ってきた。丁度頭に被さった。恥ずかしいことこの上ない。

「えー、今日よりこのクラスの副担任になった城崎カオルだ。質問ある奴は適当に手を挙げてろー」

「はい」

「はい、今手を挙げた人」

「いつまでバケツを被ってる気なんですか」

「皆が満足するまで」

「いや、取ってください。顔見せてください」

「そう言うなら取ろう」

バケツを取った、瞬間、元から静かだった空間が余計に静かになった。

いや何故だ。

「「「か」」」

「あ？ 蚊？ んな季節外れな……」

「「「かっこいいいいいいいい！」」」

「……………え？」

何事か、とタカミチを見ると苦笑いしていた。いや何故だ。

「とりあえず質問タイムだ。騒がしくすると他のクラスが迷惑だから静かにしろよ」

「はい」 「はい！」 「はいはい！」

元気なことはないのだが、俺の言ったこと聞いてたのか？
とりあえず、手を挙げさせたままにするのも可哀そうだ。
適当な人を指してやるか。

「じゃー……」

とりあえずあの中華風娘とか褐色の子とかは絶対指しちゃダメだ。
あとなんかメモ用紙用意してる子も絶対ダメだ。

「……じゃあ、泉」

事前に貰った生徒名簿で名前を確認し指名する。

「城崎先生って何歳なんですか？ 見たところ私たちとあまり変わらない様ですけど」

「ああ、それが吃驚高畑先生より少し若いくらいだ」

「「「ええええ！？」」」」

まあ、驚くよな。外見高校生にも見えないって言うのに。年齢が止まったので高校の時の筈なんだが……。あ、そうそう守護者は歳を取らない。一種の不老不死だ。まあ、大怪我とか致命傷を負えば死ぬけど。

タカミチを見ると、クラスの皆と同じように驚いている。
それを見ながら思わずニヤニヤしてしまう。

「はーい！」

「おう、鳴滝……あ、双子か。じゃあ風香」

「なんで急に副担任になったんですか？」

「じじ……学園長の陰謀だ」

そう言うのと皆が皆納得、と言った顔になる。
あのジジィ。大丈夫なのか？

「他に質問はあるかー」

「はい！」 「はい！」

「んー、朝倉」

「ズバリ、先生は恋人、或いは妻はいるんですか！？」

「とりあえずカメラは下げる。てか学校に持ってくんな、そんなもん」

「えーだって広報部だし……てか質問に答えてくださいよー」

「なんだ、部活か。なら問題ないか……。質問に答えるが、恋人なんていない」

ガッツポーズをする者数名。
だから何故だ。

「もう質問はないかー。ないなら、後は高畑先生に任せるんだが……」

「はいはいはーい！」

「……早乙女」

「このクラスに好みの子とかわかりますか？」

二本の触角の様なものをフリフリと振りながら聞いてくる。
好みねえ……。ここに居るの、皆中学生だしなあ（当たり前だけど）。

それに、俺なんかと並んだところで、皆は嫌なだけだろう。

「どうだろうな。いないかもしれないし、いるかもしれん」

シニカルに笑いながら言ったところで、クラスの皆からは「なんじゃそりゃ」みたいな顔をされた。

まあ、そうなるよな。

実際、好みと言ったら……近衛と明石、桜咲くらいだろうか。

……いかな。生徒をそんな目で見たら。いつか天罰が下ってしまふ。

そこで、チャイムが鳴った。

一時限目は英語、つまりタカミチの授業か。俺もタカミチの付き添いだな。

授業もナニかと上手いき、昼休み。

しかし、タカミチのクラス。変じゃないか？

一般生徒もいるが、一般じゃない生徒が多すぎる。気になることはこれだけじゃないし……。

とか考えながら屋上でコンビニ弁当を食っているときに、そいつは来た。

「初めての副担任はどうでしたか？ 城崎先生」

皮肉な笑みを浮かべながら屋上にやってきたのは……。

「……絡操とエヴァンジェリンか」

「エヴァで良い」

「……なんの用だ？ 授業で分からない所でもあったか」

「いや？　ただ、貴様の正体が知りたくなっただけ」

まあ、コイツになら良いか。

麻帆良の様な団体にいる、と言うわけでもなさそうだし。

「俺は、異世界から来た、と言うところまではいいな？　俺はその異世界の人の存在。『守護者』だ」

「……このことは他言無用でな」

「ああ、分かっているよ」

結局全て吐かされた。

守護者から守護神のこと。使徒とか術式とか。更には宝具の正体までバレた。

見せろ、と言われたが……さすがにそれは無理だ、と断った。

エヴァは聞くだけ聞いてさっさと行ってしまったが、腕時計を見ると既に昼休みも終わりを迎えていた。

残ったコンビ二弁当は……鴉の餌にでもするか。

そして午後の授業も全て終えた。

終わってすぐ、学園長室に呼び出されなければ清々しい気持ちで一日が終わったのだから。

「それで、なんの用だ？」

「なんじゃ冷たい態度じゃな……。君の住む所じゃが、用意できん

かった。じゃから……」

そこで一旦間を置き、学園長室の扉を見た。
狙った、と言わんばかりのタイミングで入ってきた女生徒が一人。

「城崎先生……?」

「桜咲、何故ここに……。あ、まさか……!」

後ろを振り向き学園長の顔を見る。

ふおふおふおと長い髭を撫でながら、満足気に……。

「そうじゃ! 刹那君の部屋に寝泊まりしてほしいのじゃ」

「ふざけるのも大概にしろ! あなたは何を言っているのか分かっているのか!?」

教師が生徒の寮に寝泊まり等、聞いたことがない!

「勿論、分かっておるとも。じゃが、部屋を用意できるよう急ぐ。
それまでの辛抱じゃ」

「……後で百回は殺してやる。覚悟しろよこの妖怪が……。桜咲、行くぞ」

「は、はあ……」

桜咲の腕を引っ張り、学園長室を出る。

「寿命が縮んだわい……」とか聞こえたが、気にするものか。
そのまま死んでしまえ。

桜咲の部屋に入ってまず第一声。

「すまんな桜咲。嫌なら嫌と言っていいのだぞ」

これだけは言っておかないとな。

「いえ、嫌だなんてそんな」

「それにしても、城崎先生。あなたは何者なんですか？」

そう尋ねてきたのは龍宮。褐色肌に只ならぬ雰囲気を持つ生徒の一人。

「いや、しがない副担任さ。それ以外に応えようがない。……強いて言うなら、魔法使いの存在を知っている一般人だな」

「嘘を言うなよ先生。一般人がそんな歩き方するものか。それに、一瞬の間もない雰囲気を出している」

「……まあ、魔法使いではないのだがね。魔法が使えるかどうかも分かったものじゃない」

「分からない、ということはまだ試してないんだね。でも魔法初心者にしては雰囲気……」

「魔法を遂最近知らなかった裏稼業。これでいいだろ」

「え、えーと。先生、晩御飯とかはどうします？」

「なんでもいいさ。君達のいつも通りで」

話を良い方向に捻じらせてくれた桜咲に感謝をしよう。

「さて話を戻そうか」

後で三回殺してやろうか、龍宮。

「そうそう、私たちのことは名前でもいいよ。その代わり、そちらも

名前で呼ばせてもらおうけど」

「好きにしろ」

「ああ、させてもらおうよ」

それから飯を食い、適当な雑談をした後に就寝。

……となる筈だったのだが、桜咲……いや刹那と真名が学園内の侵入者を退治しにいくということになった。

当然、俺も同行されたわけで……。

「なんでこうなったんだろう」

黒剣・黒椿と呼ばれるロングソードを一振り引っ張り出し、振るう。

俺が見たモノは、なんと鬼。それもかなりの数だ。

ただ斬り、切る。回る様に、踊る様に。攻撃をドンドン加速させていく。

「……凄い」

俺の剣技を見ていた刹那は呆けている。真名も例外ではない。

この程度で凄い、か。

この世界の力の程度が知れるな。

そして全て打倒した後、刹那に言われたのが。

「師匠になってください!」

であつた。
いやなんでだ。

「なら、私の家に来い。私の家にとっても便利な物がある」

声はエヴァ。

空を見上げると……、まあエヴァだよな。

「なんだ？ エヴァも警備か？ 大変だなー」

「ああ、全くだよ。まあ、私が来る前に全て片付いてしまったようだがね」

思わず、頭を抱えたくなる。

来る前に片付いてただ？

ふざけるな。さっきまで建物の上で見物してたくせに。

授業と居候と師匠と（後書き）

駄文を駄文と罵って尚足りない程の駄文ですね。
まあ、温かい目で見えていただけると嬉しいです。

ヒロインとか、そういうのは追々決めていく方針です。
候補としては木乃香、刹那、真名、祐奈ですかね？

新任と怒声とホレ薬と

時間は進んだ。結構進んだ。

それにしても、結局部屋が用意されなかったな。

本当に殺してやろうか。あの妖怪ジジイ。

だがまあ、クラスの木乃香の祖父とか言ってたし、さすがに殺しはしない。

木乃香の祖父であったことを幸運に思えよ、と言いたい。

今日はそんな学園長からの呼び出しだ。

朝から妖怪ジジイに会うだなんて嫌なのだが……タカミチに代わる2-Aの担任が来たと言うのだから仕方ない。

しかし……。

「おい妖怪。どういうことだ」

「こういうことじゃ」

「ネギ・スプリングフィールドです。よ、よろしくお願いします」

そこにいたのは、木乃香と何故かジャージを着た神楽坂と、今頭を下げている赤毛の子供。

これが担任？

あれ、なに？ 俺の常識がおかしいの？

早く俺を元の世界に返してください神様。いや、使徒様とでも呼ぼう。

「それで？ なんでまた子供が教師なんか……」

「修行じゃよ。立派な魔法使い……マギステル・マギになるための

な。まずは教育実習という形にするから、ネギ君のサポート、頼んだぞい」

と、言われてもなあ……。

そんな訳で今は2－Aへ案内中ということだ。

あの後、神楽坂が必死に抵抗していたがそれも無駄に終わった。

逆に、あの子供……ネギ少年を神楽坂の部屋に泊めてやってほしいと言われていたな。

神楽坂が子供嫌いだと言うことを聞いたことがある俺から見れば、同情せざるを得ないという感じだ。

俺は魔法使いの在り方という者が嫌いだ。

立派な魔法使い。人のために魔法を使う者、だったかな。一種の正義だ、とジジイは言っていた。

だが正義とは殺しを行うことと同義。

そんな者になろうと言う魔法使いは滅んでも良いと思った。

そして今度はこの子供だ。

正義の意味なんて、理解していないだろう。

理解してるとしても「ボクの頭を食べて」とか、悪者を爆破させて終わりとか、そんな感じだろ。

しかも、こんな子供に魔法秘匿なんてできるのか？

できると願いたい。

いや、できてほしい。

早速やってくれましたこの子供。魔法障壁でトラップの黒板消しがフワッと浮きましたよ一瞬。

おいおい、頭が痛くなるぜ。

しかしその後は罨に引っかかる引っかかる。

尻に二本の矢（玩具）が突き刺さってたりする。

そしてネギ少年が軽い挨拶を終えると、

「「かわいいいいいいいいい！！！！」」

と、俺の時と大体同じ流れになった。

俺の時はトラップを早々に解いてしまったから啞然としてしまっただけなのだろうか。それとも、単に容姿の違いか。

ネギ少年は囲まれて質問攻め。

早乙女に抱きつかれてたりもする。

そんな時、神楽坂がネギ少年の胸倉を掴み、教卓の上に乗せた。さすが力持ちだ。

「ねえあんた。さっき黒板消しになんかしなかった？ 何かおかしくない、あんた？」

「え……」

早速か……。

ネギ少年。そこは青ざめる所では無く、否定する所だ。ちよつと、助け舟でも出してやりますか。

「ほら、ネギ教員が困っているだろう。席につけ。神楽坂も、子供に暴力とは褒められた行為でないことくらい分かるだろう」

「「は、はい」」

皆反省しながら席につく。

まあ、基本的には良い子の集まりだ。

別段言うことを聞かないと言うわけではない。

と、言うことで授業が始まったのだが……。

ネギ少年よ。黒板に届かないからって台を用意してもらいなよ……。

いや、そんなことより。

「神楽坂は何やってるんだ……？」

さっきから消しゴムを千切ってはネギ少年に向かって投げる……いや、射撃している。

うん、あれは射撃といって過言じゃない。

しかも全てヘッドショットだ。なかなかの命中率……、じゃなくて。

まあ、どうせ。さっきの黒板消しのことで疑問を持ったのだろう。さっきと同じ事になるはずと思っただけだろう。

だからって射撃しなくてもいいだろうに……。

千切れた消しゴムを拾い上げ、神楽坂に向かって投げる。

無論、当てるわけではなく、机の上に置くだけだが。

それでも尚止めようとしないう神楽坂。

ネギ少年も、誰がやっているのか分かっていない様子。

はあ……今からこれじゃ、先が思いやられる。

自棄になったのか、消しゴムを丸々投げてきた。

なんとか当たる前にキャッチ。

「神楽坂。授業妨害をするなら教室から出ていってもらうぞ」

「う……すいません」

消しゴムを投げながら一応説教。

ネギ少年は、「あ、すいません」と後頭部を右手で掻きながら礼を述べる。

いや、そんなことより気付け。気付いて対処しろ。

本当にこれが教師でいいのだろうか。

思わず、溜息が零れた。

一応授業は終わった。まあまあと言ったところか。

子供なら、の話だが。

子供じゃないあの授業は、教師に向いていないと言われクビになるだろう。

そもそも、あれに習ってしまっただけの良いのだろうか。

幾らエスカレーター式とは言え。

……ていうか俺、何してんだろう。随分前までは使徒と奮闘していたはずなのに、今では教師か。

しかもクラスのことを結構気に掛けている。

なんだか未来が真っ暗だ。

放課後、ネギ少年を見つけた。

そこに宮崎がかなりの数の本を持って階段から登場。いや、危険だろアレ。

あ！ ほら言わんこっちゃない。体勢を崩し、本を投げ捨てながら階段から落下。

助けに行こうとした……のだが。

「ネギ君……それはないよ」

確かに、今のは間に合わなかったかもしれない。

だけど魔法を使って助けるのは、また違うだろう。

あ、しかもそれを神楽坂に見られていた模様。
宮崎がナニか言おうとしたが、その前にネギ君が連行される。

「……大丈夫か宮崎」

「あ、城崎先生……」

極度の男性恐怖症だからそれ程近づくずに話しかける。

「転げ落ちなかったのとネギ教員がいたのは幸運だったな。でも、あれだけの量の本を持つのは危険だ。せめて数冊ずつにしろ」

「は、はいー。すみません」

「いや、謝ることでもないのだが……。ま、気をつけろ」

ネギ君に対してはきつと何もないだろう。

ここは麻帆良。多少の魔法は認識阻害される。

……神楽坂と長谷川は少し阻害されていない傾向が見られるが。

「……教室では、今頃歓迎会かねえ……」

「城崎先生は加わらないんですか？」

「いや、ああいう騒がしいのは苦手なんですよ」

「へえ……意外ですね」

この数週間で仲良くなった教員。瀬流彦だ。

ちなみに、騒がしいのが苦手というのは本当だ。

俺がここに来た時も実は歓迎会を開かれたのだが、苦手と言って辞退した。

それにしても、気になることが一つ。

「どうも、刹那が近衛のことを避けるんだよねあ」

何故、と問うてみた時があったが、立場上としか説明されなかった。

元より仲が良くないだけなのかもしれないが……。とも考えた。だが立場上、なんて説明されたらその線はないだろう。

少し俺と刹那と近衛の三人で話を付けるのも良いかもしれないな。

翌日、一時限目の英語。

それは起こってしまった。俺を怒らす程の事が。

「今のところを誰に翻訳してもらおうかなー……。えーと……」

皆が視線を逸らす。

そんな中、一番視線を逸らす神楽坂。

「じゃあアスナさん」

「なっ……。何で私に当てるのようっ!？」

そこからネギ君と神楽坂のやり取りが少々。

その後委員長である雪広の挑発により神楽坂が頑張って翻訳しようとしている。

そんな時だった。

「アスナさん。英語ダメなんですねえ」

「なっ……。!？」

ネギ君は言ってしまった。
しかも笑顔で。

「アスナは英語だけじゃなくて数学もダメですけど」

「国語も……」

「理科社会もネ」

「要するにバカなんですわ。いいのは保健体育くらいで」

次々と述べられていく悪口。

陰口でないのが救い。というか、悪意のない悪口。

それでも他人を辱め、傷つけるには十分なモノだ。

「あ、あんた――」

「黙れっ！」

アスナの言葉を遮ったのは俺の怒声。

これまでに大して怒らなかったからか、教室内はポカンとした者ばかり。

その中でもネギ・スプリングフィールドが一番ポカンとしていた。
今ではその顔に腹が立つ。

「ネギ・スプリングフィールド。問うぞ。君の役目はなんだ？ 生徒を侮辱することか？ 違うだろ。生徒を良い方向へと導き、特徴を活かせる環境を作ることだ。神楽坂は確かに頭は良い方ではない。だが、それがどうした。ここが学校。教育機関だ。生徒に分からぬことがあるのは当たり前。その分からぬことをどれだけ分かり易く理解させるかが大事なことだ。……君の授業は確かに解りやすい方だろう。だがそれを理解できていない人がいる。なら自分はどうすべきかを考えろ」

俺の長々としたセリフに空気が凍てつく。

段々ネギ君は顔色を青くしていった。

今頃気づいたのか、ともう一度腹が立ってくる。

「せ、先生。ネギ先生は子供なんですから……」

と言ってくる。顔は見えないが、声からして雪広か。

「教員をやっている時点で『子供だから』なんていう言い訳も免罪符も方便も存在しない。……そもそも、委員長である君も教室の騒ぎを止めるくらいしろ。長々とすまなかった。授業を続けてくれ」

そこからは比較的静かだった。

まあ、俺が喋らせない雰囲気を出していたからだが。

その中で授業をするネギ・スプリングフィールドの精神は崩壊寸前かもしれない。

俺にとっては知ったこっちゃないが。

……数分後、授業中にも拘わらず学園長から呼び出しがあった。なんでも、ネギを優しい目で見てやってほしい、と言っていた。無論、話し合いの余地もなく断固拒否したが。

Side カオルがいなくなった後の教室。

ふう……という溜息が教室に満ちる。

その後、一気に騒がしくなる。

「ねえ、なんであんな急に怒ったの？」

「知らないわよ。……前まではちよつとした騒ぎくらいじゃ怒らな

かったのに……木乃香はナニか知らないの？」

「な、なんでウチが知つとると思うん？ 知らんに決まってるやろ」
「だよね……」

そんな騒ぎと共に、授業は終わりを告げた。

Side out

麻帆良内のある広場。

「はぁ……またアスナさんに酷いことしちゃった」

ネギはその広場にある階段に座り込み、一人悩んでいた。

どうすれば神楽坂アスナのためになれるのか、と。

原作ならば、ここで宮崎のどか等の三人が訪れるのだが……あの後の気まずい雰囲気の所為か、訪れる事はなかった。

そんな時、ネギの鞆からナニかがカランカランと落ちた。

「これは……魔法の元丸薬七色セット……！？ こ、これがあればホレ薬みたいな作れるかも！ よーし！」

と、生き込んでアスナとタカミチのためにホレ薬を作った。そう、作ってしまったのだ。

この後に地獄を見るとき知らずに。

Side カオル

「アスナさん！ アスナさーん！」

俺が教卓の前に座り、近衛と話をしている時にネギがやってきた。さっきまでの雰囲気放っていないとはいえ、立ち直りと言う名の開き直りが早くないか、ネギ？

ちなみに、授業が終わり、教室に戻った時にエヴァからなかなか良い怒声だったぞと褒められた。

いや、褒められたと言っているのか……？

とか言ってる間にネギが何やら怪しげな試験管を……………。

「おいネギ教員。何を…………『うわああ！』……………ふがつ！？」

いつの間にか後ろに立っていた俺に驚いてか、ネギが試験管を高く投げた。

そう、俺の真下に来る感じに。

パリーイン！ と、試験官は割れて俺に降りかかる。

……ん、この液体不味いな……。

「……ネギ先生？ 少しお話ししましょうか？」

「ヒイツ！」

思わず顔が笑ってしまう。

無論だが、怒りすぎてだ。頭が痛くなってきた。

「し、城崎先生…………」

「…………ん？ どうした近衛」

「せんせーい！」

「なっ！？ ちょ、やめ…………！」

「木乃香!？」

近衛が抱きついてきた!

なんでだ! 展開が急過ぎて何も解らん!

神楽坂も同じく、という感じか。」

「あー……僕はテストの採点があるんでこれで!」

ちっ……ネギの野郎逃げやがった……。あのガキ、ただじゃおかねえ。

「せんせーい……」

「い、いい加減離れろ! 近衛、お前正気か!？」

(作者…木乃香だけが抱きついているのは、ホレ薬の量がかなり少なかったからです。いや、飲んだ量が少なければ、効果も小さいかなーっと思ったり)

おいなんだ今のは。ホレ薬? どういうことだ説明しろ!

(作者…何も知りません。ええ、私は何も知りませんとも)

くっそ……後で百回殺してから千回地獄を見てもらうからな!

「え、なにに? 先生と木乃香って……」

「えー! まさか先生と生徒の禁断の恋……!？」

「お前ら、近衛を剥がすの手伝え。生徒と恋なんて非現実的な物語を作り上げるな!」

「「はーい!」」

その後、近衛は眠りから起きる様にして正気に戻った。

自分がやったことを聞かされて悶絶していたのは言うまでもない。

「ネーギせんせい……」

「ひい！」

ネギの後ろを追いかける俺は幽鬼の用だと聞いたのはいつだった
だろうか……。

新任と怒声とホレ薬と（後書き）

なんだろう。原作があるとサクサク進む。
と言っても、その代わりと言わんばかりの駄文だけど。

どこか誤字や脱字、ストーリーの間違いなどありましたら、感想にて
教えてくださると俺が凄く助かります。

ドッジとテストと刹那と

それは、俺が職員室で静かなコーヒーの時間を楽しんでいる時にやってきた。

「うああ~~~~ん！」

「城崎せんせ~~~~い！」

「な、なんだ？」

泣きながら泉と佐々木が職員室に入ってきた。

突然のことに騒然とする職員室。新田先生だけは、「またか……」と静観しているけど。

「何があった？」

「こ、校内で暴力が……」

「見てくださいよ、この傷っ！」

そう言っで見せてくるのは手の甲。

確かに、擦り傷になっているな。

「今行く。案内しながら詳細を話せ」

「「はい！」」

泉と佐々木に案内され到着したはいいが……ネギ？ 君は何をし
ているんだ？

女子高生に囲まれ抱きつかれている。

お前教師としての自覚があるのか、という疑問を持つしかない。

「いい加減におよしなさい、オバサマ方!!」

そう言ってボールを女子高生の頭部に放つ雪広。

「……おいおい」

「ここはいつも私たち2－Aの乙女が使っている場所です。高等部の年増の方々はお引き取り願います?」

「挑発してどうする」

「ひゃ!?! し、城崎先生……?」

なんだろう。背後に回って驚かすのってこんなに楽しいモノなのか。

と、いけないいけない。今は説教の時間だったな。

「高等部の奴らだったな。話は聞いている。どうやら今回は君達の方が仕掛けたらしいね。それに、佐々木につけた傷。小さな怪我だが、君達はドッジ部で更に関東大会優勝者だと聞いたことがある。そんな者が投げるボールに当たった佐々木はどうなっていた“かもしれない”と思う? 新体操をやっているとは言え、身体は君達よりも子供だ。当たり所が悪ければどうなっていたかな?」

「う………すみません」

「謝れば良い、という問題でもないんだけどね。まあいい。さっさと行け。このことは新田先生にも報告しておくからな」

納得がいかないながらも踵を返し帰っていく高等部の面々を見送る。

見えなくなると、今度は安否確認か。
後ろを振り返ると……。

「え、高校生にもなってドッジ部？」

「ドッジって小学生くらいまでの遊びちゃうの？」

「大会にはあいつらしか出なかったんじゃない？」

……うん、それは俺も思ったよ。

けど言わなかったんだからさ……。

「怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫ですわ」

「……雪広。お前もお前で叱るべきことがある。あの時の挑発と言
い頭部への投擲と言い……。許されることではないと言うのは解っ
ているな？」

「は、はい……」

「……反省しておけ」

踵を返して、恐らく冷めてしまっただろうコーヒーを飲むべく、
職員室へ向かう。

Side 体育前の2-A

「やっぱり城崎先生って頼りになるにゃー」

と、言うのは明石祐奈。

「うん、確かに」

それに応えるのは大河内アキラ。

今は体育前とあって絶賛着替え中。

女子校だから覗き見る男子なんていない。

それが惜しいとも言えるスタイルを持つ女子だらけだ。

そもそも中学生なのか怪しい人ばかりなのだが……。

「それに比べてネギ君はちょっと情けなかったかなー？」

そう言うのも明石祐奈だ。

今話しているのは先程までの出来事。

「えー、でも可愛いよ？ それに十歳なんだし……。」と、佐々木まき絵が弁解を試みるが。

「可愛くても、頼りにならないとなあ……。それに城崎先生も言ってたでしょ？ 免罪符は無いって」

「もう、なんなんですか？ 皆さんネギ先生のこと可愛がっていたくせに……」

「可愛がってたけど、いいんちよ程じゃないよー。それにもうすぐ三年になるし、やっぱり頼りになる城崎先生の方が断然いいでしょー」

それにいいんちよ、と呼ばれる雪広のネギの可愛がり様は異常だ。シヨタコンとは怖いものでもある。

「なにかあったん？」

と、問い掛けるのは黒い髪を腰くらいまで伸ばした近衛木乃香だ。

「さっきまで高等部の奴らとちよつとね。その時に城崎先生が助け

てくれたって話」

「へえーええなあ。ウチも外出てればよかったわー」

何気に木乃香は城崎に思いを寄せている。

え？ それって問題じゃないかって？ だって宮崎のどかだってネギに思い寄せてんじゃん。

だからオールオーケーでしょ。

「ほらほら、今日は屋上でバレーなんだから、皆早く行くわよ」
「解ってるよー」

この先に何が待ってるかも知らずに、2-Aは屋上へ向かう……。

Side カオル

嫌な予感がした。

嫌な予感ほどよく当たると言うが……まさか、屋上で高等部の女子がいるだなんて……。

「なんでこう君達は絡んでくるんだ？」

「い、いえ！ 私たちは急遽自習になってバレーになって……」

「なら、なんでここでやっている？」

「高等部の屋上が既に使われていて……」

「ほう、俺には誰もいない様に見えるがな……」

高等部は結構離れているが、ここから見えない程ではない。

それは屋上もまた然り。見れば、そこには誰もいない。ボールすらない。

「はあ……。さて、ネギ教員」

「は、はひ!？」

いやいや、急に指名されたからってその驚き方は無いよ。

「君ならこの状況、どうする？」

「え、えーっと……。ボクなら……。あ、スポーツマンシップに則って球技での対決! ドッジボールで負けた方が大人しく下がる、というのはどうでしょう」

……普通ここは穏便に済ませて、向こうを引き下げる、なんだから。

しかもドッジボールって……。

「まあいいだろ。これも授業に一環としよう。協力してくれるかな? 高等部の諸君」

「は、はい……」

「じゃあ、各クラス十一人ずつで行う。宮崎、確かルールブック持っていたな。悪いが審判になってくれ。中立の立場で見えてくれよ」

「は、はいー」

結果的に勝った。

神楽坂と雪広の活躍で圧勝。

イエーイ! と騒ぐ2-A。

「つく、これでもくらいなさい!」

高等部も諦めが悪い。

神楽坂に向かって強力なボールを放つ。

まあ、ネギ君に任せるか。

と思つてた。気付いたら高等部の女子の三人の服が脱げてた。

「……なあ、これって俺が悪いのかな」

「さ、さあ？ どうでしょう……」

思わず明後日の方を遠い目で見る俺。

苦笑いの刹那。

まあ、苦笑いする他に何もできないのだろう。

余談だが、その後職員室にてネギがドッジ部に勧誘されていた。

それから数日後。

朝から妖怪に呼び出された。いい加減にこの流れも嫌になってきた。

「で、なんだ？ 用って言うのは」

「……いつから喫煙する様になったんじゃ？」

「ああ、タカミチに一本貰ってさ。ちよつとハマった」

「そ、そうか。それで、これなんじゃが……」

そう言つて差し出される一枚の封筒。

「なんだこれ」

「ネギ君の最終課題じゃ」

——びりっ。

「あ！ 開けおった！ 普通に開けおったよこの人！」

「うるさい、黙れ。……って、なんだこれは。いいのか、これ。タカミチでも無理だったんだろ……？」

「しかし、これがクリアできんかったら実習生のままじゃし……そろそろ正式な教員になってもいい頃合いじゃろ？」

いいえ、すぐに送還すべきです。

と言っても意味ないんだろうなあ。

「それで、この課題か……。『期末試験最下位脱出』なんて、辛すぎると思うぞ？」

「できんかったらそれまでじゃ。まあ、渡しておいてくれよ？」

「なー木乃香ー」

「んー？ どうしたんや？ カオル先生」

いつの間に敬語なしの関係になったんだ俺達は。

いや、その方がいいんだけど。

「ネギの奴の最終課題って投げ出しているかなー」

「めんどくなるんも分かるけど、ちゃんと渡しといたほうがええと思うよ？」

まあ、そうなるよなー。

お、言ってる傍からご本人登場。さて、渡してくるか。

「ネギ教員、少しお話があるので来ていただけますか？」

「はい？ い、いいですけど」

そして屋上。

「あ、あの……ボクまたなにか怒られる様な事しましたか？」

「ああ、いや。今日はそういうのじゃないんだ。ただ、あの妖怪……学園長に頼まれてね。君への最終課題だ。クリアできれば正式な教員として認める、ということだそうだ」

「え、さ、最終課題！？」

……どうしたネギ君。

なんか、悪のドラゴン……とか、魔法二百個取得……とか呟いてるけど……。

一体どんな課題を想像しているのやら。

「これが課題内容の封筒だ。既に俺が目を通してもらったが……ネギ君、覚悟した方が良い。これは、恐らく俺でも厳しい課題内容だ」

「え……………」

封筒を渡しながらそう言うと、蒼い顔になっていくネギ少年。

……少し大袈裟にしすぎたか。

いや、でも事実だしなあ……。

さて、俺は教室に戻るか。

教室に戻ると、クラスの皆に言い寄られた。

「噂で聞いたんだけど、今回の期末試験で最下位脱出しないとクラスが解散ってホント!？」

いやいや、一体なにをどうしたらそんな噂が広まるのかね。

うむ……あの妖怪の陰謀を崩すのも面白いかもしれんな。

なーんだとか、よかったーとか言いながら各席に着席していく。

妖怪の陰謀を崩すのも良いが、偶にはやる気を出させるのもいいだろう。

そう言うと、教室がシン……と静かになる。

[illegible]

同時に一気に騒がしくなった。

さっきまで静かだったせいかな、余計に耳が痛くなる。
そんな騒がしい中、聞こえた単語が一つ。

「やっぱり魔法の本を取りに行くしかないね！」

……あまり面倒なことを起こさないでほしいのだが……。

案の定。

図書館島にて、バカレンジャーと呼ばれる神楽坂、古菲、綾瀬、
長瀬、佐々木の面々。更にネギ教員が行方不明になったと言う報告
が入った。

やばい。頭が痛いを通り越して熱くなってきた。

誰かこのやり場のないストレスをどうにかしてくれ。

というか、早く俺を元の世界に返してくれ……。

早乙女と宮崎、木乃香もそれに携わったらしい。とりあえず、バ
カレンジャー十一人が帰って来てからまとめて説教だな。

そして図書館島から帰ってきたのは期末試験当日。

それも遅刻をしての到着だった

かなり眠気を催している様だが……。

ネギ君の魔法により頭が冴えた様だ。

……本当は魔法を使わせない方が良かったのだが、今回ばかりは
目を瞑ろう。

結果的には最下位脱出どころか、一位まで取ったしな。

余談だが、俺と新田教員による説教は一時間以上行われた。

放課後、エヴァ宅・別荘にて。

「ほら刹那。隙だらけだぞ」

「うっ……くう！」

まさか、本当に刹那の師匠になるとは思わなかった。

しかし……刹那の剣は確かに良いモノだ。

速くて重い。だが、それは子供ということで見た視線だ。

正面から来る攻撃にはそれなりの対応を示すが、「来るはずもない場所」からの攻撃にはかなり弱くなる。まあ、実戦経験がまだまだ浅いのだと思うが。

「……今日はここまでにしよう」

「え……？　なんかいつもよりも短くないですか？　私はまだいけます。続けましょう」

「急ぐこともないだろう。この中で成長を止める葉がなかったら今頃お前は高校生並の体形になってるんだぞ。それまでにお前は修行をしている。何を急ぐ必要がある。ゆっくりすればいいさ」

「………ですが、私は」

「木乃香のことか？」

「……！？」

凶星か。

あの様子から仲が悪いと言うわけではないというのは解っていた。だがどうも刹那は木乃香を避ける。

「詳しく話せ。立場だけではないのだろう？」

「わ、私は……」

「人じゃない、か？」

「あ………え……？」

「気付かないでも思ったか？ お前、人間と何かのハーフだろう？ 隠す必要はないさ」

「……鳥族と人間のハーフです」

「そうか……。だがなあ、刹那。お前、勘違いしてるぞ。どうせお前、『自分は化物だ』『木乃香お嬢様と一緒にはいられない』とか『正体がばれるのが怖い』とか思ってるんだろ」

木乃香の立場は妖怪に聞いた。

それが原因かとも思ったが、やはりそっちよりもハーフの方を気にしているみたいだな。

「いいか。化け物ってのはな『確かな理性を以てして人殺しをし、愉悅に浸る。罪悪感の欠片も感じない人間』のことを言うんだ。お前は、人殺しをしたいのか？ したとして愉悅に浸る様な奴なのか？」

「い、いえ！ そんなことは……」

「ならお前は化け物じゃない。人間じゃない、と言うなら俺だってそうだしな」

「え……？ カオル先生も、ですか？」

「ああ、そうか、言ってなかったな。俺はこの世界出身じゃなくて、異世界出身なんだよ。元は普通の人間だった。だけど、一人の少女との出会いで俺は変わった。守護者という存在になれた。守護者は不老不死。人間としての三大欲求も捨てた。ただ人間と敵対するモノを潰す為だけの存在だ。もしかしたら、この世界にもいるかもな、俺が潰すべき存在が……。ああいや、長々とすまなかった」

「……………なんか、すみません」

「何故謝る。謝る必要は無い。俺が話してもいいと思ったから話だけだ。……ほら、中に入ろう。ちょっと休んだら、すぐ修行再開だ」

それにしても、便利な空間だ。

ここでの一日が外での一時間だとか……常識を覆し過ぎだ。
時空の覇者と呼ばれた守護者ならできたかもしれないが……。

「それにしても、いろいろ企画外だな、カオル」

「ん？ 何が言いたい」

「あの剣捌き。幾ら人でないからと言って、そう簡単に身に付くものでもないだろう？」

「あんなの、術式を使えば簡単にできるさ。元々、俺は剣の才能ってモノが微妙だからな。あると言えばあるし無いと言えば無い」

「そもそも、その術式が規格外だけだな」

確かにこの世界からすれば規格外だろう。

なんせ、それなりの実力があればどんな現象でも起こせるのだから。

聞いたことがある一例は《破壊の王》と呼ばれた使徒か。

対象の中に術式を描き、術式を解放させると同時に対象を破壊させる。

その術式は複雑極まりなく、連射性がない。

更に力を多く使うから、一気に使える数がかなり限られる。

その弱点を突かれて討伐されたいが。

俺のできる実戦用の術式は、物質を糸状にさせるものだ。

条件は、遠隔的に術式を描けない。故にその糸にする対象に触れていなければいけない。

だからって対象を拾ったり、態々対象に近づくなんてことをして

たら時間の無駄だ。

だから、黒椿を糸状にさせる。

その糸は俺の自由自在だ。しかもかなり細く、かなり丈夫。これを使えば人を微塵切りにすることだって簡単だ。

その技術を手に入れるには数年掛かったが。

ちなみにエヴァは《人形使い》だ。

糸の扱いにも長けている。俺が作った糸を見たエヴァは、「もっと作れ。そして私に譲れ」と言ってきた。

一応作ってやったが。

更に強力な術式となれば空間術式なんてものもある。

術式による現実世界への侵食。

禁術とも言われ、時空に影響があるかもしれない術でもある。

実戦で使ったことが無いから戦力になるかどうかは分からん。

そうそう、不干渉領域という結界も存在するが、しれも空間術式の一部なんだとか。

術が弱い故に禁術とまではいかないらしい。

そのことを言ったらエヴァに実践してくれ、と言われた。

無論、断固拒否した。

それから数日後、春休み。

春休みには旅行に行くことになった。

旅行に行く人数は三人。

木乃香と刹那と俺。何故こうなったのかと言うと、木乃香に手伝ってほしいと言われたからだ。

刹那との仲を修復したい、と。

刹那が木乃香を避けてる理由が解ったが、どうしたものか……。結構厄介だな。

ただでさえネギ少年が魔法の秘匿をしないことで頭を痛めていると言っている……。

長谷川の服をネギの武装解除くしゃみで布切れにしてくれやがったという報告を聞いたのは、記憶に新しい。しかし、俺が魔法を知っていると
言うことはネギに教えたくないんだよな。なんとなくで。

ドッジとテストと刹那と（後書き）

なんか他の人の魔法先生系小説よりも展開が早い気がするなあ。

ちよつと修学旅行編早くやりたくて焦ってるかもw

いや、メインヒロインとカオルを早くくつつけたいからかもしれないw

指摘などあったら感想にてお伝えください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1331v/>

魔法先生ネギま！ 黒椿の担い手

2011年10月8日20時07分発行